

わんぱく豆知識

異年齢保育についての豆知識。

「条件的異年齢保育」

子どもの数が少ないなどの条件から仕方なく異年齢集団で保育せざるいない状態が保育時間の一部分ではなく大半を占め、同年齢でクラス編成をしていない場合。

「理想的異年齢保育」

同年齢集団でクラス編成できる条件があるにも関わらず、保育理念や考えに基づき異年齢でクラス編成をしている場合。

「たてわり保育」

クラスを年齢別（よこわり）ではなく、いくつかの年齢にわたる集団を縦てに割って編成する。あるいは、一定の時間帯を異年齢のグループで過ごすように設定する際に使われています。複数の異年齢集団がある状態で、意図的に縦割りの編成をする「理想的」な異年齢保育です。

「混合保育・合同保育」

いくつかの年齢にわたる乳幼児をひとつの集団として保育する際に使われます。年齢別に保育する集団規模に満たない人数である等、いたしかたなくという「条件的」な要素が大きいといえます。基本的な集団は同年齢であっても、朝夕の時間、土曜日等、「混合保育」「合同保育」を行うのが一般的でしょう。

「異年齢交流保育」

保育の基礎集団は同年齢で編成されている園で、異年齢間のかかわりを意識的につくる取り組みです。散歩の際に、小さい子の手を引いていく、午睡の際に小さい子の布団を敷いて、寝付くようにトントンしてあげる「トントン当番」、3～5歳のグループで昼食をとるなど、定期的に「たてわり保育の日」を設けるといような形が見られます。

★一日の保育時間のうち全く異年齢で過ごす時間がないという園はほとんどないでしょう。自由遊びの場面では自然と異年齢のかかわりが出てきます。ある小規模園では「年齢別に保育しています」と言われていたましたが、午前の設定保育の時間以外はクラスの枠を超えて活動する場面が多く、異年齢集団での保育が保育時間の相当を占めているように見受けられます。つまり実態として異年齢保育が大多数の園に存在し、その割合がおおいといえます。

「異年齢保育の生活と環境」

異年齢保育を基礎集団にするということは、生活の拠点に年齢の異なる子供たちがいるということであり、年齢幅のある子どもたちによって暮らしが営まれるということです。敢えて異年齢保育を選択する園では、その場を「おうち」とか「へや」と呼ぶ園もあります。そこには家族兄弟のような親密なかかわりがあり、ゆったりとしたくつろぎのある暮らしを作るとい指向性が表れています。そうした暮らしの中で、遠出をしていた年長児が「ただいま」と帰り、年少の子たちが「おかえり」と迎える姿がみられてりします。

ただし、当然のことながら、保育の場は「住まい」の機能だけではなく、十分な遊びを展開できる場を保障しなければなりません。特に年長児については同年齢集団での活動を意図して組む園が多いようです。

年齢幅がある子ども集団にどのような生活とあそびの展開を保障するのかという構想のもとに、それにふさわしい園舎や保育室がつくられている園もありますが多くの園は既存の限定された条件の中で様々な工夫を凝らしています。3歳から5歳の二つの集団が二つの部屋をそれぞれの生活拠点にしながらその部屋だけで遊ぶのではなく部屋ごとに別の遊具がおいてあり、自由に行き来している場合もあります。